

億に飛躍させるといふのが計画建設の大構想。こうした畜産の振興は当然堆肥肥の増産につながり、それが地力増進、収量増産という結果を生むわけだ。好循環とでもいうべきか。

牧野改良については別項にも述べたが開墾によつて牧草をつくり、牧野の残るものは植林して治山治水にも役立てる。林業の粗収入は三十年後二十億と見ても、これらで平均七千万円、これも前記農業収入に入ると通計五年収入



きびしく冷えこむ朝晩の気配はなく、農家の軒先に縁側に、庭に注ぐ冬の日ざしは、干大根をまがしく照らす。阿蘇の日中は、あたくかく、そしていかにも静かである。(写真・阿蘇町石にて)

先頭に立つ三千人

現在八千町歩の水田中、三千町歩は保温折衷を行つて好成绩を収めてをり、逐次増加の傾向をたどつてゐる。

十五億に近い、これを一万三千戸の農家に割当てると平均四十五万円だ。昭和三十年の統計では年収十八万円だから丁度二倍半になるわけ。ゆめてなく、せひそうしたいものだ。

天然色映画もつくる

毎年一〇〇万をこえる阿蘇登山客のために観光施設は国際的な視野で進められている。坊中駅から山上までの十五キロは登山道路の舗装が完成、山上茶屋から火口までのロープウェイも一月中には竣工の見込みだ。地元の阿蘇町では十六キロ、一千フィートのカラーフィルム観光映画大阿蘇をつくつた外、内牧に大衆向の温泉センター、大観峯には名付親蘇峯翁の碑をたてる計画もある。

国際的観光地へ

又時代の花形水稲早期栽培も、三十二年度は一三〇町歩であつたが、三十三年度は七〇〇町歩へ飛躍、計画建設の最終年度昭和四十年には二、〇〇〇町歩が見込まれている。これら農業改良の旗手として、阿蘇郡産振連盟や四Hクラブ連盟協議会など約一五〇〇〇人が先頭に立つてゐる。

その活動の一例として阿蘇郡一福増産



—天地悠々の感—
木国田独歩

天地寥廓、而も足もとでは凄じい響をして白煙濛々と立騰り、真直ぐに空を衝き急に折れて高嶽を掠め天の一方に消えて了ふ。壯といはんか、美といはんか、惨といはんか、僕等は黙つたまゝ一言も出さないうで暫く石像のやうに立つていた。此時天地悠々の感、人間存在の不思議の念など

の、心の底から湧いて来るのは自然のことだらうと思ふ。」
(忘れ得ぬ人々)

巨人の石臼
徳富蘆花
眼を上ぐれば白、俯して見れば白、天地は須臾にして虚無界となりぬ。唯聞く蓬々たる天風此の混沌の中を吹き通つて空に吼ふるを唯聞く、此の白濛の中雷ていの忽ち止むが如く絶大なる蒸気機械の忽ち露々として、高く響き忽ち静まりて微に響くが如く、巨人の手あつて絶大なる石臼を挽廻らすが如く、般々轟々足下に轟くものあるを。

(青山白雲)

秋雨の中
夏目漱石
圭さんは立ち留まつて黒い煙の方を見る。濛々と天地を鎖す秋雨を突き抜いて、百里の底から沸き騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて幾百噸の量とも知れず立ち上がる。其幾百噸の煙の分子が悉く震動爆発するかと思はる程の音が、遠い遠い奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上がつて来る。
(二百十日)

一戸当り四反七畝

た人々が、どつと帰つてきたため、耕地の狭い島に二四万人の人がヒシメキ合つている。このアンバランスをどうするかその対策を現地に打診してみる。

山は海にまで迫つて平坦地は極く僅か。耕地は全地積八八、七四八町歩のうちの一割六分にすぎず、その又七割は用水不足田、排水不良田、老朽化田、急傾斜地等で、農家の一戸当り耕作反別は僅かに四反七畝という零細農家なのです。

この様に狭い耕地面積に対して農家人口は十七万人といひますから、既に飽和点を達し出稼きに出ざるを得ないという状況です。又離島ゆえに生産物をさばくには大口消費地は遠く、災害常襲地帯として不安定な農業を営んでゐるのです。

こうしてみますと、シロマンの島々天草郡の農業は、クリシタンの十字架ではなくてシロマンの十字架を背負つてゐるという人もある位です。

然し、こういう状態がそのまゝ見すごされてはいけません。

県では昭和二十二年産業振興計画樹立以来天草地域総合開発計画をもつて離島ゆえの産業の後進性を打開するため色々努力を重ね、又二十三年には果樹試験場天草分場、二十六年には農業試験場の天草分場も設置して、適地適産の指導に乗り出しました。

このほか、二十七年には湿田単作地域改良促進法に基づく指定をうけそれによつて、二十八年には離島振興法と急傾斜地農業振興臨時措置法に基いて夫々指定をうけ、科学的な総合開発の軌道に乗せられたのです。

更に「新しい村づくり」と云われる新農山漁村建設総合対策では、天草郡内で三十一・二年度に峇北地域をはじめ合計八地域が指定をうけて産業施設の充実に努めてきました。各市町村でも、県の計画建設に歩調を合せて、夫々総合実態調査を行い、それを基礎として総合振興計画を樹て、積極的に基礎施設の整備と産業の振興に努めてゐるのです。

その中でも、貧困な天草産業の「突破口」とも云われて、が然脚光を浴びてきた「水稲早期栽培」と「果樹園芸」特に「柑橘栽培」は、各市町村とも大きくとりあげて、今後ますます発展しようとしてゐます。

(写真は新植す、む五和町の蜜柑園)



天草農業の突破口

天草といえば「クリシタン哀史にいろどられたロマンスの島云々」というおさまりのキャッチ・フレーズ。そのロマンの島も戦後は外地や他県に出稼ぎに出てい

た人々が、どつと帰つてきたため、耕地の狭い島に二四万人の人がヒシメキ合つている。このアンバランスをどうするかその対策を現地に打診してみる。